

## 記念号の刊行にあたって

北川 浩

本年3月31日をもちまして、経済学部で長い間勤務されました近藤正先生が退職されました。近藤先生は1992年4月に成蹊大学経済学部教授に就任され、それから23年間にわたり主として英語の担当をされてきました。ここに本号を先生の退職記念号として、ささやかながら先生の長年の功績に対して感謝の意を表したいと思います。

近藤先生は海外での研究歴が豊富で、コロンビア大学、ランカスター大学、南イリノイ大学等で研究を続けられ、1986年に帰国され東海大学外国語教育センター助教授として日本国内での本格的な研究活動を開始されました。その後当時本学部で英語を担当されていた鈴木紘治先生のお声掛けで、本学部の専任教員に応募採用され、上に述べたように1992年から本学部の教授として教育・研究に携わってこられました。また2004年度には学科主任という要職を務められ学部の運営に多大なご尽力をいただきました。この2004年度という年は、全国に先駆けた改革として、それまでの経済学科と経営学科を一つに統合して経済経営学科を創設した年であり、成蹊大学経済学部にとって歴史的な年でありました。大規模な学部改革によって志願者を大幅に伸ばした一方、学部運営は多難を極めました。このような大変な時期に学科主任の重責を担われたことに改めて頭の下がる思いがします。

近藤先生は経済学部においては主として英語を担当されておりましたが、先生のご専門は「連句」であり、とりわけ連句を世界に紹介された功績は多大であり、この分野の世界の第一人者と言っても過言ではないと思います。先生は社団法人日本連句協会の常任理事、公益財団法人落柿会の評議員などを務め、この分野での社会貢献も枚挙にいとまがないほど多岐に上っています。先生は俳句や連句を全世界に広め、「地球俳句」という概念のもと言語の壁を越えて様々な言語による俳句や連句の世界を築き上げていきました。ご退職の直前の2014年3月22日に出版されたご著書『世界へ飛んだ蛙:芭蕉から地球俳句へ』(里文出版)は、先生の「地球俳句」活動や「国際連句」活動の集大成とも言うべきもので、地球俳句の広がりが多くの事例により紹介されています。

以前私が近藤先生とお話したとき、「私のホントのホントの専門は哲学のシンボル論や

記号論なんだよね。」と照れながら話されたのが思い出されます。あまり知られていませんが、先生は南イリノイ大学などアメリカでは記号論の研究をされており、帰国直後には「真言密教：解説の記号学」（『東海大学紀要外国語教育センター』1992）と題する論文を表しており、ご自身が研究を続けてこられた「パースの記号学」と、空海によって展開された「解説の記号学」としての理論の対比を試みています。このような記号論哲学にもとづく緻密な分析はその後の地球俳句の研究においても脈々と受け継がれており、先述した『世界へ飛んだ蛙』の中にもその一端を垣間見ることができます。この本の第2章の中で、芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」という俳句の代表的な英訳を22種類取り上げ、この俳句を英訳する場合の言語学的な構造を極めて緻密に解析しています。これはまさに俳人としての繊細な感性と哲学者としての透徹した理論が融合したものであり、先生の研究の集大成と呼ぶにふさわしいものだと思います。

こうしてあらためて近藤先生の足跡を振り返ってみますと、「巨星がまた一つ成蹊から去って行ったのだなあ」という思いが強くいたします。最後になりましたが、先生の長年にわたる成蹊大学経済学部への貢献に重ねて感謝申し上げるとともに、先生のますますのご健勝ご活躍をお祈り申し上げます。

（成蹊大学経済学部長）